研究の栞

日本古建築研究の栞（第二十六回）

天沼俊一

第三十二　幣軸（上）

幣軸とは、普通和樣建築出入口の左右（例へば第二〇九圖）又は左右と上方（例へば第二一〇圖）とを廻つてゐる所の四角、切面、或は唐戸面の樣な繰形をもつた木の名である。これは單に裝飾のためにあるので、構造上には支輪と同じ樣にまるで役に立つてゐない。尙ほこれは唐樣と天竺樣とにはない。

室町時代に和唐折衷式が隆盛であつた頃には、まだ夫程でなかつたと思ふが、桃山になると大分樣式は混淆してしまつた、江戸は猶更さうであつたことは改めて述べる迄もない。從て棧唐戸等も板唐戸より賑であるところから、前者の方が後者よりも餘計用ひられたことも、既に記したところである（第十一卷第四號第一三一頁上段及同第一三二頁上段）。だからそんな場合には幣軸を廻らしながら棧唐戸を吊り込んでゐるのである（京都高臺寺靈屋・東京市外池上本門寺塔婆）。棧唐戸其物はいふ迄もなく和樣ではないが、樣式混淆後だから、かういふのがあつても差支ないのである。

幣軸の大部分、殊に奈良以後のは、連子窓（後出）の框又は桟唐戸の面のうち、唐戸面に似た一種のきまりきつた繰形をもつてゐるのであるが、其形に二種あつて、甲は片方に丈け出たところがあり（第一九六・二〇四・二〇五圖）、乙は兩方がでてゐる（第一九七・一九八等例多し）のである。さうして甲は、平安時代までの樣であるが、乙は永くつゞき現代迄さうである、恐らくはこれからさき永久にさうであらう。

柱の兩方に出入口がある場合（第二一〇圖の如き）、時としては、幣軸が相互に近接してゐるため、柱は其極く一少部分が間から、見えてゐるから、二つの幣軸が柱の如く、ほんとうの柱は斯樣にして形つくられた溝の底の如く見える折もある（中尊寺金色堂）。

【建築字彙】には

神社ナドノ板唐戸ノ周圍ニアル繰形付ノ化粧木ニシテ卽チ一種ノ額緣ナリ幣軸ト扉トノ間ニハ必ズ方立アルコト圖ノ如シ（圖略）

とある。併しながら板唐戸に必ずあるとは限らないで、ないときも可なりある（實例多し）。ないときは扉軸摺の孔は上下共長押等にあけてある。同時にまた板唐戸に限つたことはないので、桟唐戸にも用ひてゐるときがある（實例前出）。

例へば豐後富貴寺大堂正面中央出入口、山城淨瑠璃寺本堂側面出入口の樣に、方柱又は圓柱の次に小脇羽目があり、其次に角柱をたて、あとは方立に扉といふのは、この角柱が幣軸の代用としてゐる（第二〇三圖の幣軸を角柱にするとこれになる）とも、又はこの角柱に幣軸をつけるのを（第一九七圖不動堂の夫れ又は第一九八・一九九圖圓教寺十妙院の夫れ等參照）省略したとも、どちらにでもとれる。前の樣に考へると、この角柱も幣軸と同じに取扱ふべきであらうが、さうすると角柱との區別がつかなくなる、だから今はこれを幣軸とは考へずに、やはり角柱のうちに入れておくことにしておく。

次に幣軸は各時代によつて、どの樣な變遷をも

つてゐるかを調べてみると、先づ

飛鳥時代

のものでは、法隆寺のほかない樣である。當代のは中門・金堂・塔婆何れにもあるが、これ等の形は出入口兩側の柱に添ひ、見付せまく見込の大きな斷面長方形の木があり、上の方は薄い木で限られてゐる。この場合この竪の木が幣軸である。さうしてこれは柱についてゐる時(中門・塔の場合)と、少し離れてゐる時(金堂)とある(第二〇〇・第二〇一圖)。法隆寺の例に於いては、中門のが一番幅が廣く、金堂と塔婆のは夫れ程でない。さうして塔婆と中門のとは柱についてゐるが、金堂のは少し離れてゐる。

當代には面取のがあつたかなかつたかは、遺物がない今日判斷のしやうがないが、多分何れも四角なものであつたらうと思はれる。

奈良時代

のものでは、第一海龍王寺五重小塔の初重四方の出入口に何れも原始的片繰出式がついてゐる、だからこの時代から唐戸面式のが用ひられたと見てよからう。何分前期のは、これきり實例が殘つてゐぬので、一般に廣くこの式のが用ひられたか、或はかゝる工藝品の場合にのみ限つてゐたか、其邊また判然せぬ。

例へ工藝品丈けにせよ、こんなに發達したのがあつたと同時に、一方には飛鳥直系の四角なものが法隆寺傳法堂に於いて見出される(第二百〇二圖)のみならず、東大寺三月堂にもある。この樣なのは當代で終りかと思ふと、なかなかさうでなく、鎌倉時代になつてもまだある。

此の四角なものゝ一方、扉に近い方の角を削り落すと、そこに面ができるが、夫れは最も簡單な切面である。この切面を少し大きく思ひ切つてとつたとすると、榮山寺八角圓堂の幣軸(第百二十一圖㋺)になる。これは正に奈良時代後期のものであるが、

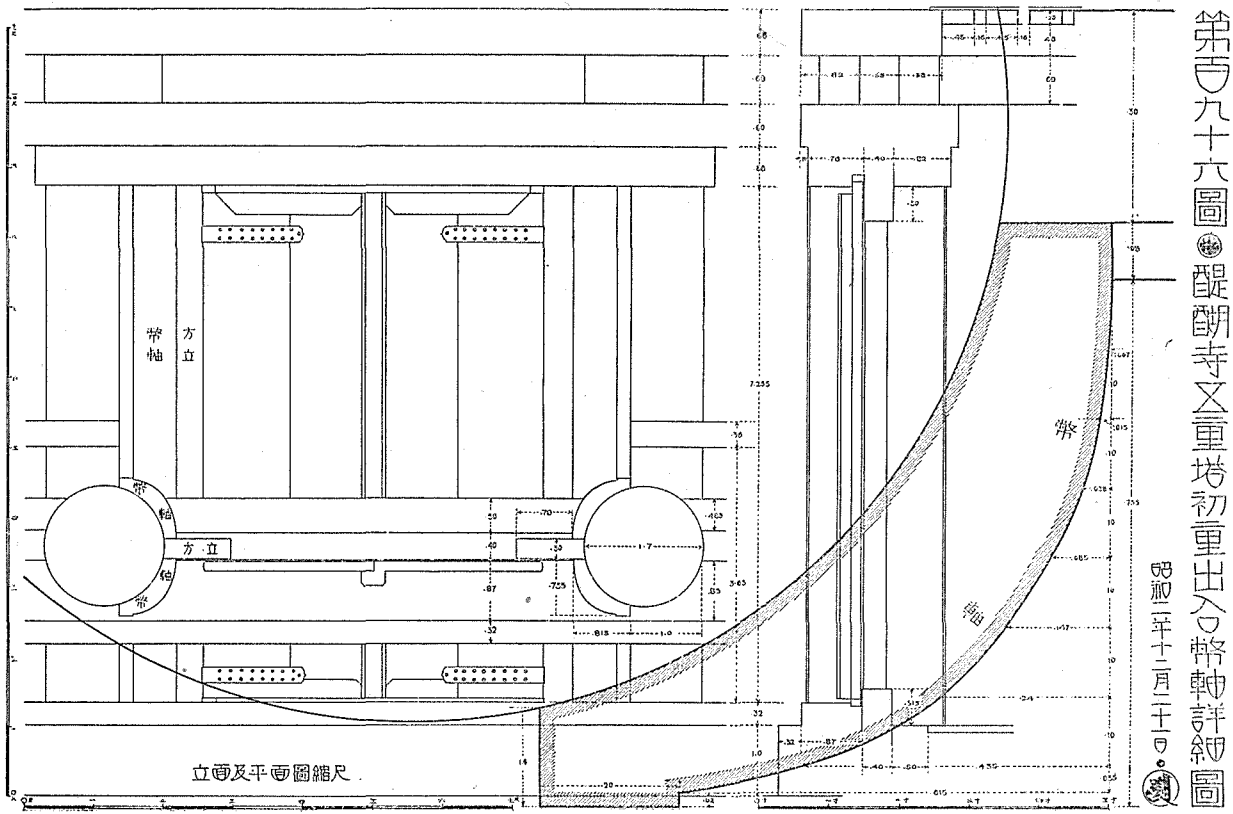
其の發達の順序からいふと、其幼稚なことは飛鳥式に亞ぐものである。こんな例はこれ以外に遺物がないから、當時に於いても澤山にあつたかどうか判らない。尙ほ榮山寺の場合には、柱に沿ふて竪にある丈けで、上にはなく長押にぢかに孔をあけてあるから、旁前代の直系と見られる。

唐招提寺金堂のは、少し圖は小さいが第百二十圖にある。外側のは後世の最も普通の型と變りがないが、內側の方は出たところが柱附の方に丈けで、方立の方はでゝゐない。然るに新藥師寺本堂になると、幣軸は割合に薄く、且つ內外側共方立附の方はでゝ居らぬ（第二〇三圖、圖面は次號にだす）

唐招提寺金堂は鎌倉時代に手が入つてゐるのだから、外側の丈けは其時分にかへたのかも知れない、とも考へられるだらうし、後者は明治三十何年かの、古社寺保存法に據る最初の修理のとき全部とりかへたと見えて材料は皆新しくなつてゐるから、證據が殘つてゐないっ從て前例に倣つたとも、又は想像で古式を稽えてこんなのを造つたとも、どちらとも考へられる。

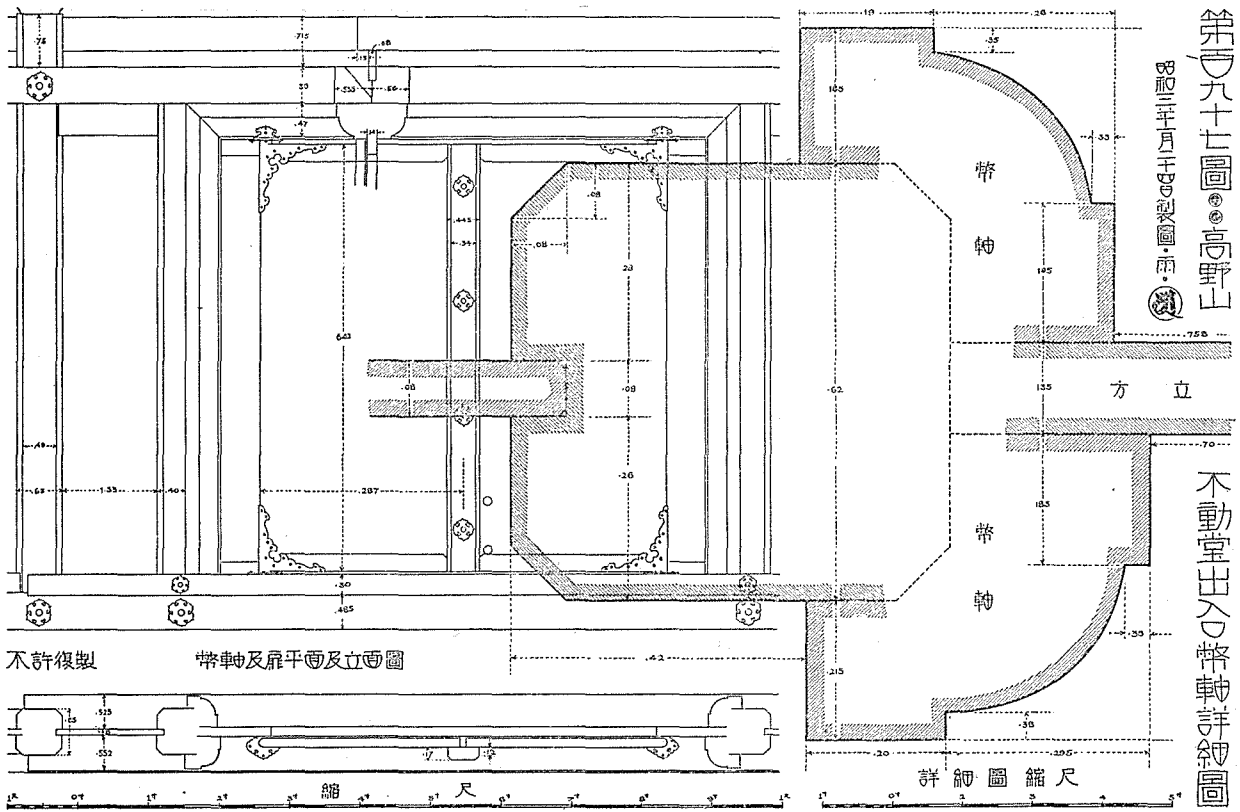
四角から切面になつたといふ、尤もらしい發達の順序等を考慮した上に、上記の事實を都合よく解釋すると、海龍王寺五重小塔のが既にさうであつたのをみても、當代のは多く片方に丈け出たところがあつたのだ、としても大して不都合はないやうである。この片繰出式のは其まゝ次の時代迄傳つた、といふのは醍醐寺五重塔の夫れに用ひてあるからである。

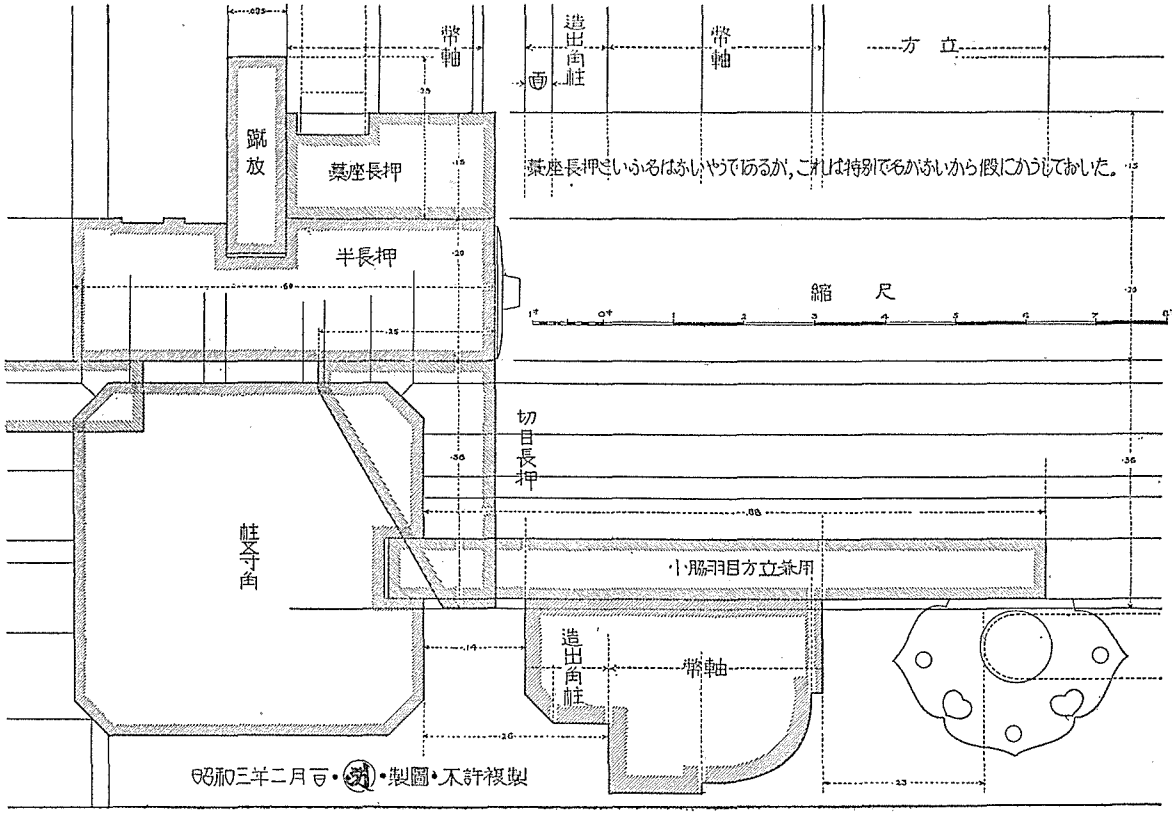
併しながら、かうばかり考へるのは隨分無理があらう、だから當代になつては、飛鳥直系のもあるが、建築術の發達に連れ、幣軸も相當に進步して片繰出又は兩繰出つきのができだし、永く範を後世に垂れて現代に及び、通り越して未來永劫この形でつゞくものとしておく方が穩當であらう。



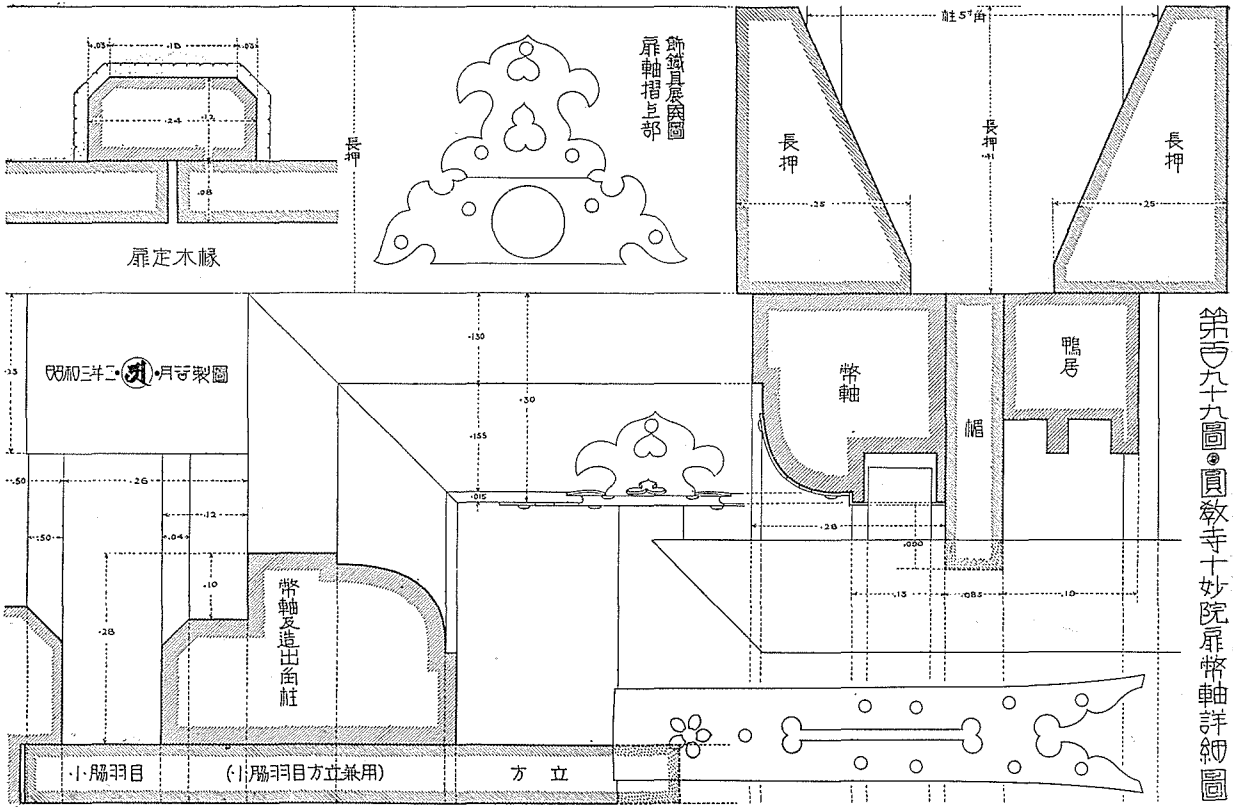
第百九十六圖　醍醐寺五重塔初重出入口幣軸詳細圖

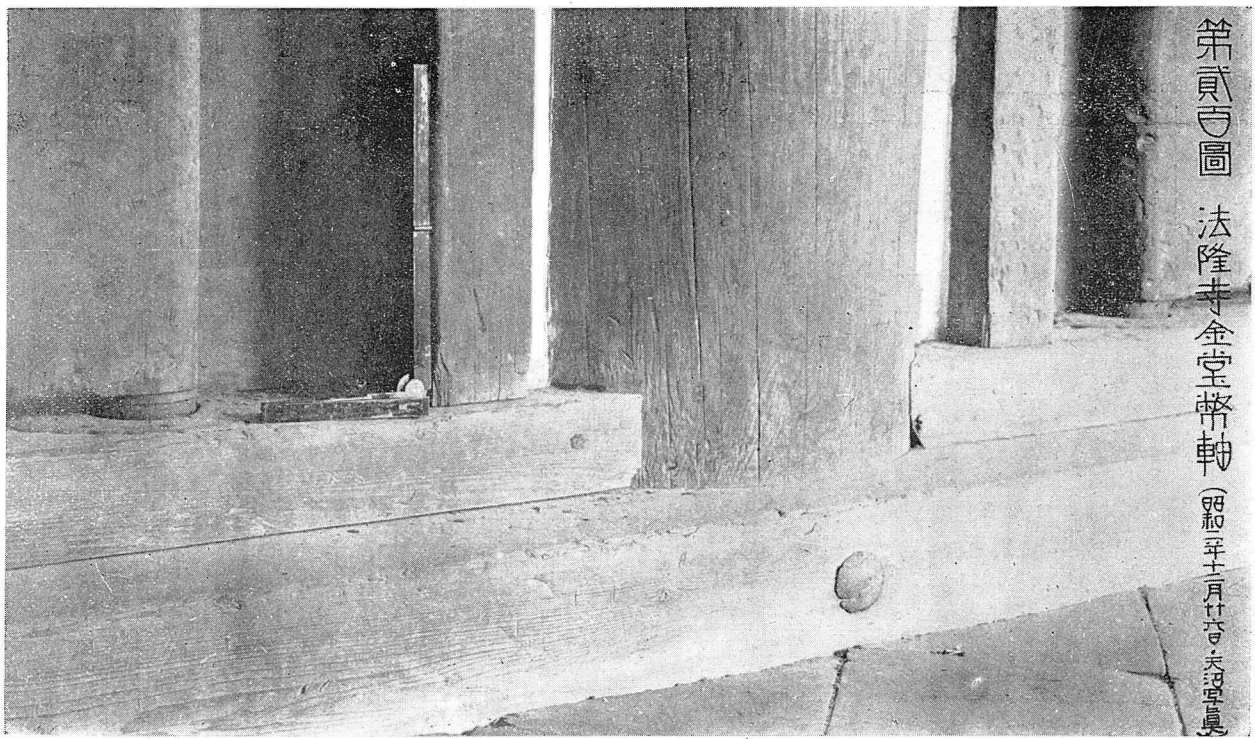
昭和三年十二月二十日


第百九十七圖 高野山
昭和三年月千日製圖・南
不動堂出入口幣軸詳細圖
幣軸
幣軸
立方
詳細圖 縮尺
幣軸及扉平面及立面圖
縮尺
不許複製

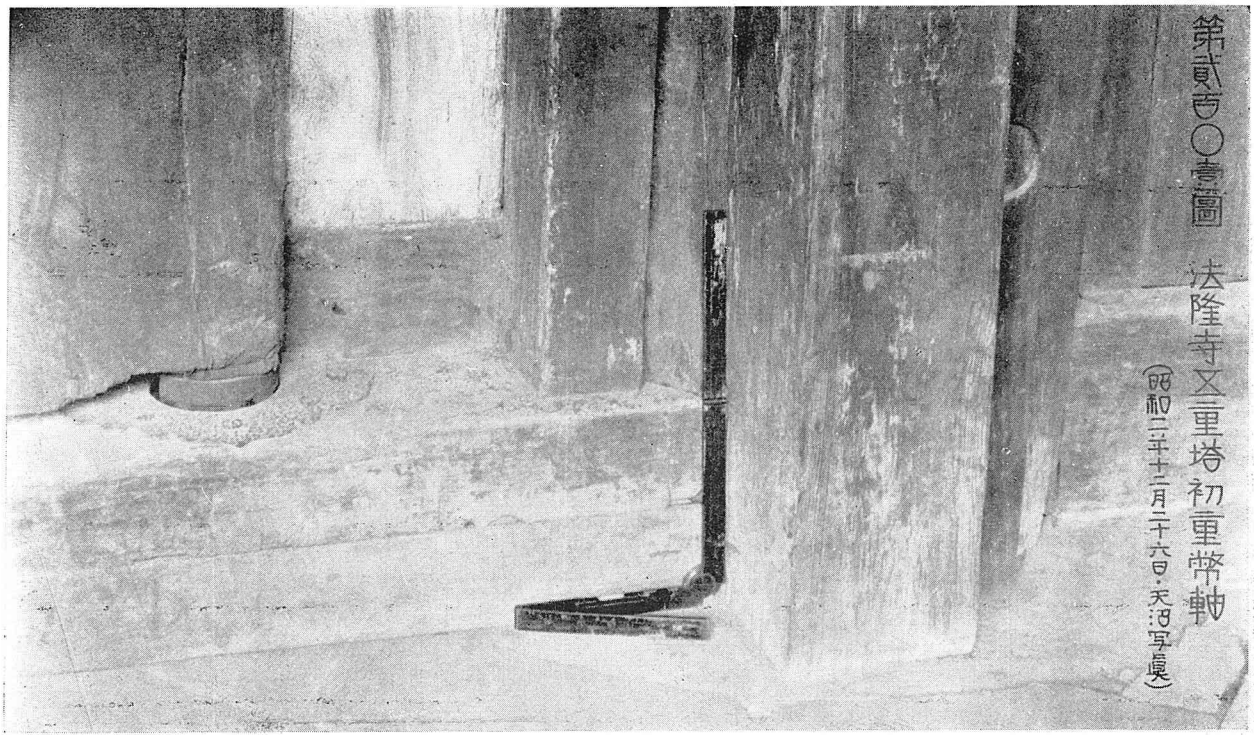


第百九十八圖　書寫山圓教寺十妙院扉幣軸詳細圖

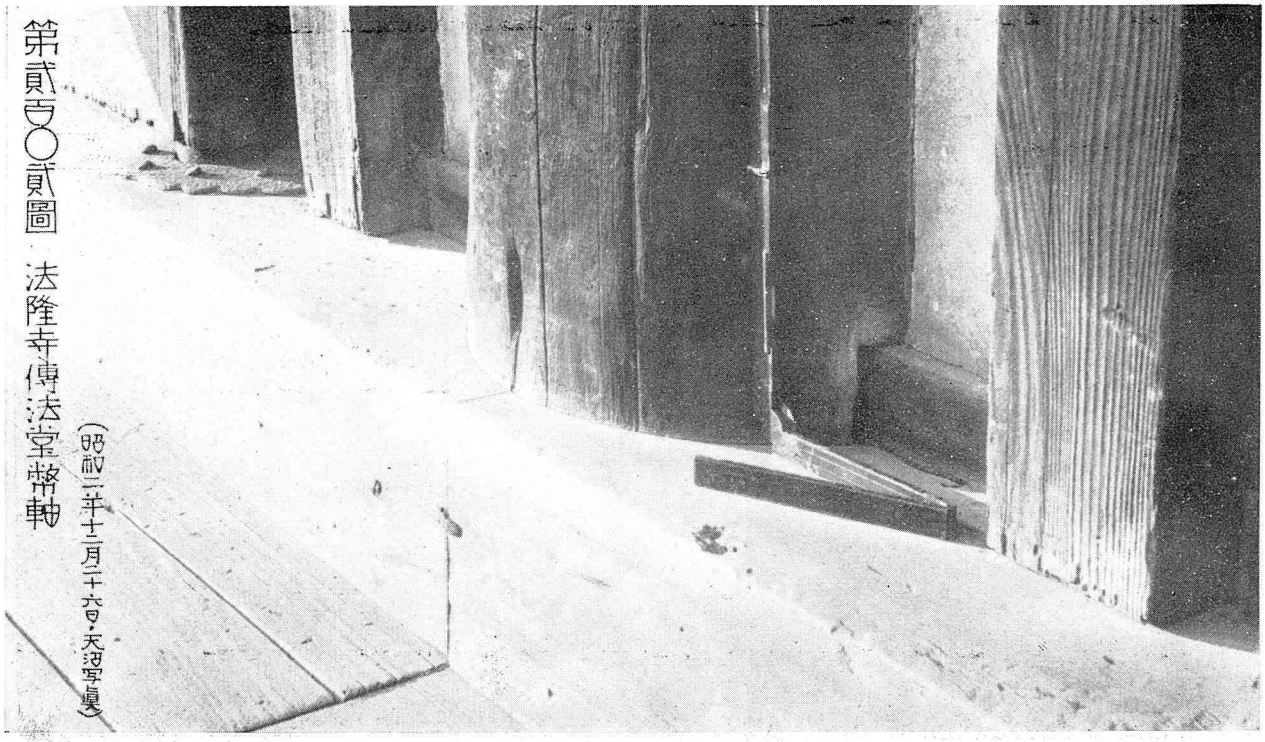

第百九十九圖 圓教寺十妙院扉幣軸詳細圖
長押
長押
長押
鴨居
幣軸
幅
立方
(用兼立方目羽目小)
目羽目小
幣軸及造出角柱
扉軸摺上部
飾鐵具展開圖
長押
扉定木縁
圖案寸月・月寸・二年昭和



第貳百圖　法隆寺金堂幣軸（昭和五年十二月廿四日　矢澤寫眞）



第貳百〇壹圖　法隆寺五重塔初重幣軸
（昭和二年十二月二十六日・天野写真）

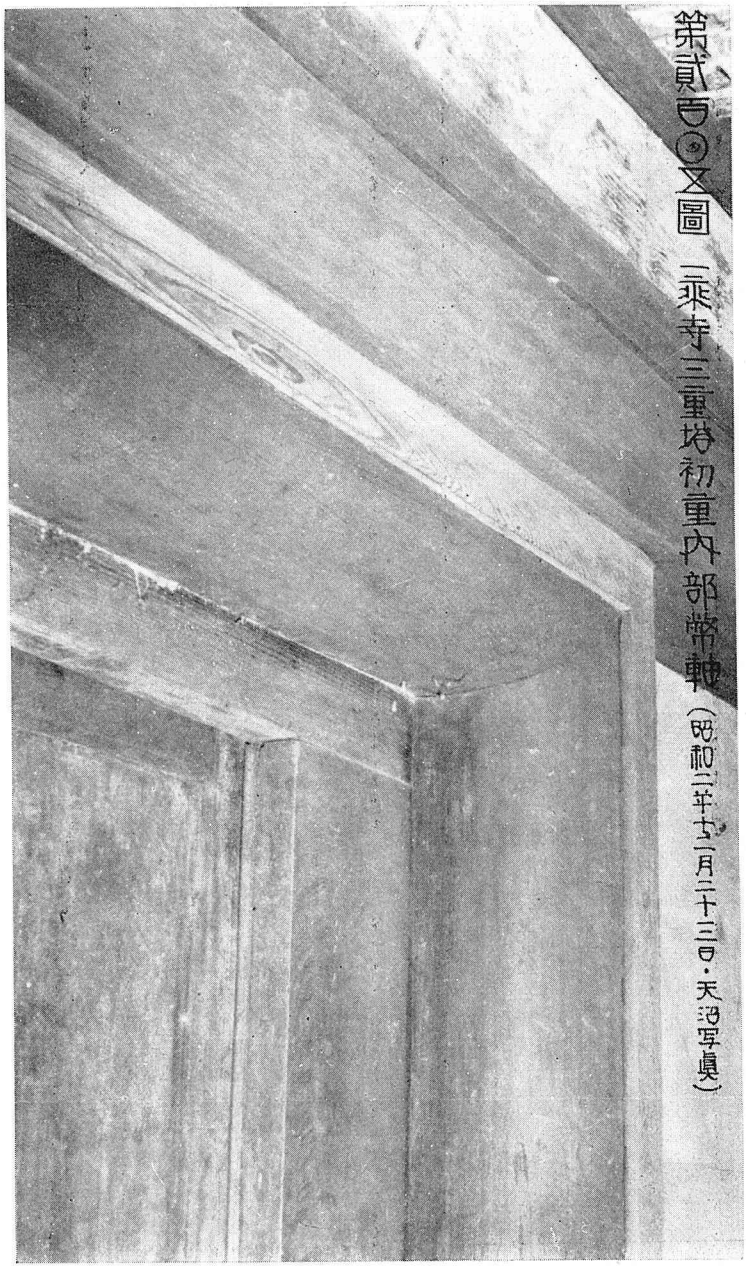


第貳百〇貳圖　法隆寺傳法堂幣軸

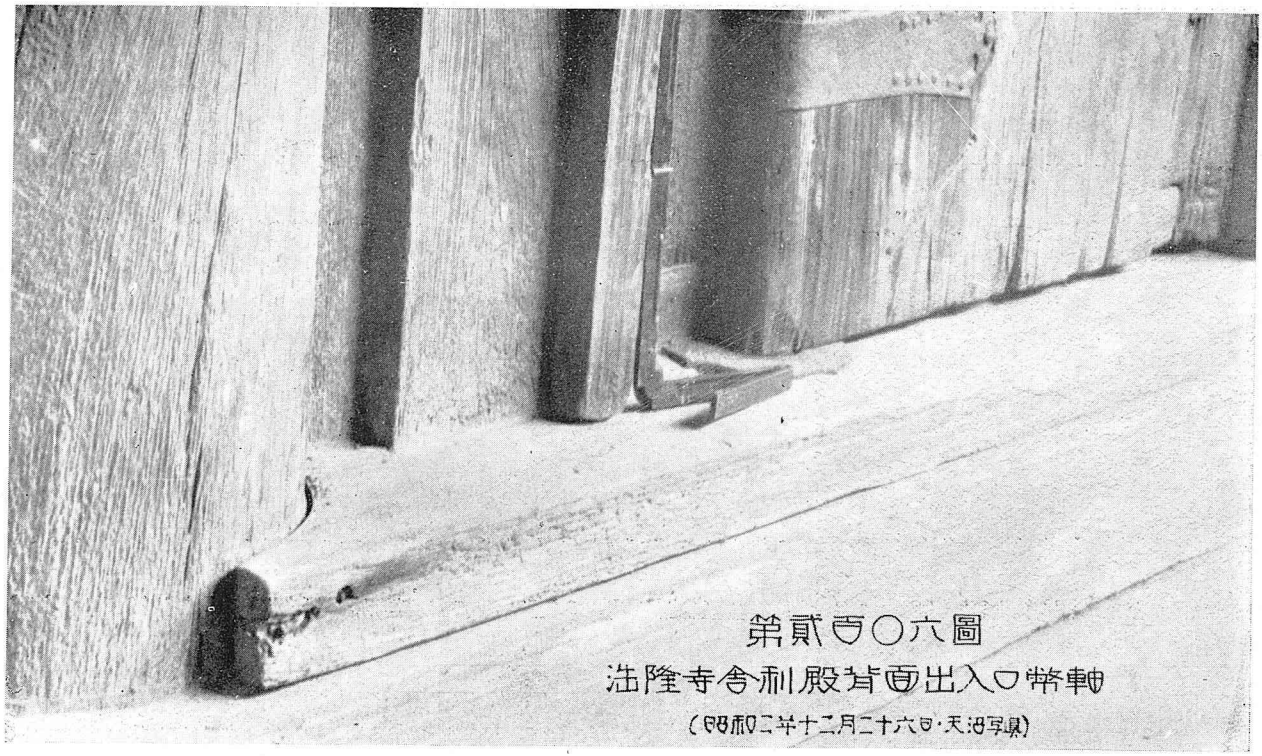
（昭和二年十二月二十六日・天沼寫眞）

第貳百〇參圖　新藥師寺本堂正面出入口幣軸及唐居敷　大正十五年一月一日・天沼寫眞

第貳百〇肆圖　醍醐寺五重塔初重內部幣軸（大浦氏寫眞）



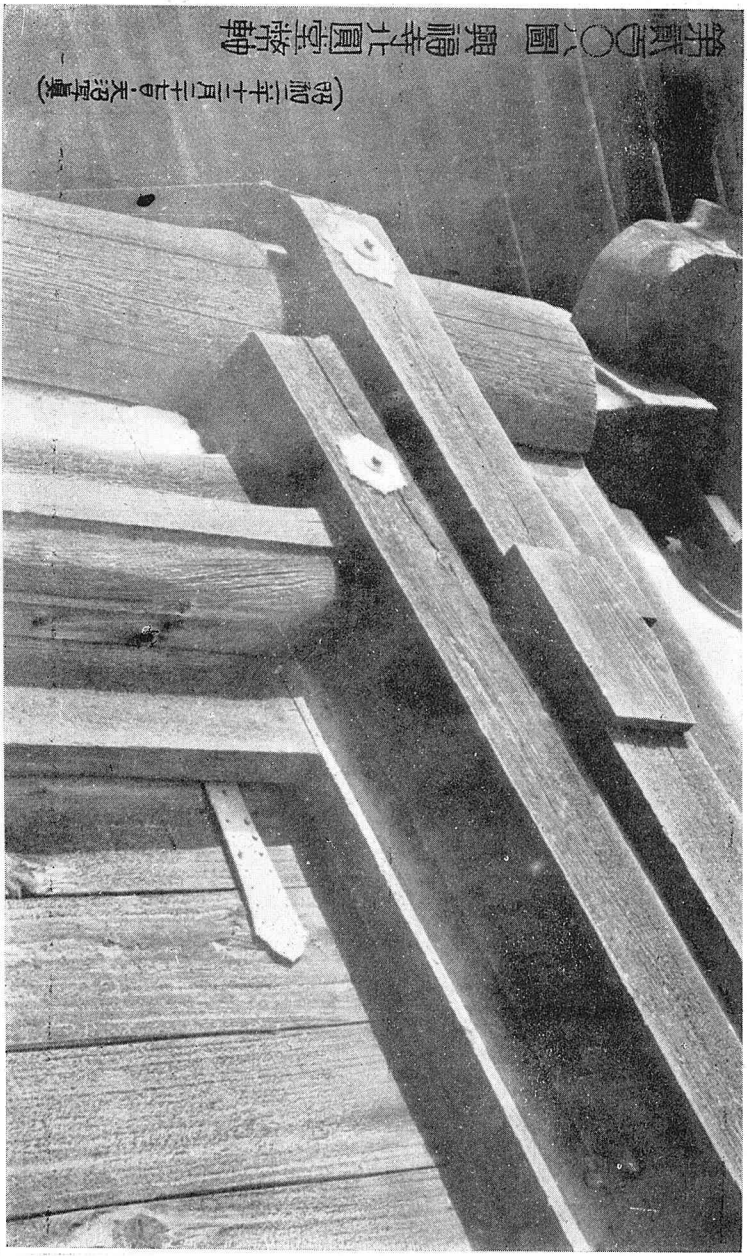
第貳百〇五圖　三乘寺三重塔初重內部幣軸（昭和二年十二月二十三日・天沼寫眞）



第貳百〇六圖
法隆寺金堂殿背面出入口幣軸
（東京帝室博物館・昭和二年十二月二十六日撮影）

第二〇〇十圖　一乘寺妙見宮破壞

（昭和三年十一月十日撮影・天沼俊一）



法隆寺の〇八圖　聖徳太子八圖宮殿部
（明治三十年二月十日撮影）

平安時代

のは前期に遺物なし。後期になると先づ醍醐寺五重塔の例をとらねばならぬ。第一九六及第二〇四圖は、内外部の夫れを示したものであるが、この場合も三方を廻らないで、柱に沿ふて竪にある丈けである。これも亦圖で明らかに判る通り、出たところは一方に丈けで、古い形をもつてゐる。其形は平面の詳細圖に就て充分に觀察すべきものである。

扨てこゝに一つ考へねばならぬものがある。夫れは一乘寺三重塔初重内側の幣軸である。

一乘寺は兵庫縣加西郡下里村大字坂本にあり、姫路驛から自動車で堂々とのり込むか、儉約してバスで行つて三十何町歩くか、又は播但線法華口驛から約一里徒歩せねば行けぬ。此の寺の三重塔は特建の目錄によると永祿五年になつてゐるが、大分問題である。尤も寺傳によると、孝德天皇の御願、法道仙人の建立となつてゐるが、これは論ずるには及ばない。永祿五年といふのは、昔しは寺傳にあつたか知らぬが、今はないやうである。

此塔の細部は、例へば斗栱の如きも、室町時代の復古建築たる興福寺五重塔・同寺東金堂・喜光寺金堂等の夫れ等に比べても隨分せいが高い。また其初重二重の四方斗栱間にある墓股も、醍醐寺藥師堂や宇治上神社本殿、降つては常樂寺本堂向拜（滋賀縣甲賀郡石部町）の夫れの如く、二つの木片を中心で合せたものである。これ等の斗や墓股の全部が古いとは思へぬ、大部分はたしかに後にまねして造つたらしい――これ等は永祿としても惡くはないやうである――が、中にはもつと〳〵古いものと思はれるのもある。斗栱や墓股は永祿のもの、卽ち全部この時造つたとしては、餘りに古調を帶びすぎてゐる。初重内部佛壇周圍の勾欄も亦、室町にしてはよすぎる。同内部の幣軸は到底室町のもの

ではあるまい。

斗と垂木との關係は全く六支掛になつてゐる。其他いろ〳〵新しいところもある。相輪亦古くない。だから平安時代の塔婆がひどく壞れたので、室町かいつか後に再建のとき、僅か殘つた古いものに倣つて不足分をつくり、今のを建立したのではあるまいか、といふやうなことを誰でも一通り考へて見るであらう。

前置が大變長くなつてしまつたが、本文はこのあとへ少しつく丈けである。そこで初重內部の幣軸である。第二〇五圖は、北側出入口の夫れをみたところであるが、出たところが片方丈けだといふことゝ、後世のの樣に斷面が一象限に近くはなくて、奧行の方が長手であるといふことゝ、材料も古いといふことを少し考へに入れて、科や蟇股等の古い方のものと同時代、卽ち平安時代のものをこゝに應用したのではあるまいか。もう少し遠慮せずにかくと、應用したのであらう。としておかうと思ふのである。

幣軸は各出入口の外部にもあるが、夫れ等は風雨に曝されてゐるから、大分しやれてゐるし、出たところも兩方にあるのだから、これは永祿の時につけたのである、といつてもいへないことはなからう。私は今內部のものに就てのみいふのである。室町時代のところへ書かうと思つたが、一寸思ひ切つてこゝにかいたのである。

兩方に出たところのある例としては、白水阿彌陀堂及び中尊寺金色堂のをあくべきである。後者は第一七五圖（前號第一四頁）にある樣に、普通の繰方をもつたのが、左右と上と三方を廻り、既に記した樣に上の方から原始的蓮座がでゝゐるのは珍らしい。この幣軸は形もいゝから、當代のこの種の代表的のものとしてよからう。たゞ柱を挾んで餘り接近してゐるため、溝の樣なものが其間にできて

ゐるから、知らぬ人は何のための溝かと不思議に思ふかもしれない。次の

鎌倉時代

になつても、前述の通り飛鳥式のがあること第二〇六圖に示した樣である。圖に於いて一尺の曲尺（上が少し切れてゐるが）がたてゝある左の木が夫れである。其右が方立、夫れから扉、左は面なしの角柱の次が小脇羽目、一番手前の太いのが圓柱、椽の一部、切目長押、二重長押（半長押）等、あらゆるものが寫眞にでゝゐる。

海住山寺五重塔（第一二圖）、法隆寺聖靈院（第一二圖）等のは既に扉のことをかいたとき、序に圖示しておいた。第一九七圖は高野山不動堂のである。これは圖で明らかな通り、內側と外側とで其大さが異つてゐる。かうやつて圖にしてみると、異つてゐるのは大して體裁がよくないが、これ位の差はたゞでは中々判らない、圖にしてみて初めて判る位なら、何も苦心して全く同じにつくる必要もないのである。但し不動堂のは幣軸の橫に面取の角柱がある。さうして本柱（これも面取の角柱であるが）と、この幣軸に並んだ角柱とは可なり隔つてゐるから、この場合この角柱がないと少し淋しい氣がするであらう

然るに第二〇七圖では、本柱（これは圓柱であるが）とこの面取角柱との間に、極く幅の狹いあつてもなくてもいゝ樣な羽目がある。まさか小脇羽目をなくすことも變であらうから、一層の事角柱をやめにしたらばと思はれるが、さうしないであるから、大分にせゝこましい樣に見える。この場合幣軸と柱とは一木から刻み出してあるから、柱はいかさま物であるが、こんなのは此の時代以降ある。幣軸の上の木を兩方へのばし、長押の下に沿ひて圓柱を抱かせてあるのは、興福寺北圓堂の夫れ（第二〇八圖）と同じ考へで、たゞ後者は上が幣軸にならずに、添長押にしてあり、さうしてこれについてゐる角柱には面がとつてない丈けの差である。